

See discussions, stats, and author profiles for this publication at: <https://www.researchgate.net/publication/335501451>



Preprint · August 2019

---

CITATIONS  
0

READS  
864

1 author:



**Yasuhiko Nagano**

Freelance Researcher in Economic History of Silk Industry

9 PUBLICATIONS 0 CITATIONS

SEE PROFILE

Some of the authors of this publication are also working on these related projects:



raw silk labels [View project](#)



history of silk-reeling [View project](#)

■調査報告

## 小野組築地製糸場をさがす

長野 恭彦 (蚕糸業史研究者)

### 第1章 日本初の本格的製糸工場

小野組築地製糸場は、日本初の本格的な製糸工場である。ヨーロッパの器械製糸技術の導入では、1870(明治3)年設立の前橋藩営製糸場の方が早い。規模は前橋の12人繰に対して、築地は当初60人繰、のちに96人繰に拡張したといわれるので、築地が本格的な工場らしい製糸場である<sup>1</sup>。国営の富岡製糸場に先立つこと一年以上前の1871年9月(明治4年8月)に操業をはじめたこの製糸場のことは、忘れられがちである。

小野組発祥の地は、琵琶湖西岸の大溝(現在の滋賀県高島市)である。いわゆる近江商人として南部藩(現在の岩手県北部)に進出して成功を収め、その後京都に本拠を移して両替商と生糸売買を二本柱に事業をいとなんだ。戊辰戦争における官軍の戦費調達に功績などにより、太政官各省および各藩の為替方(出納代行)を三井組、島田組とともにつとめた。また、横浜にも進出して輸出生糸の売り込みも手がけた。その延長に、東京築地に製糸場を建設し、輸出生糸の製造もおこなった。小野組のなかで

このプロジェクトを主導したのは、のちに足尾銅山で有名になる古河市兵衛であり、器械製糸の技術を指導したのは、前橋藩営製糸場とおなじスイス人のミュラーであった<sup>2</sup>。

この製糸場が実在したことは疑いのないところだが、筆者はその所在地をピンポイントで特定した資料を知らない。製糸場そのものが操業開始後2年たらずの1873(明治6)年6月に閉鎖され、翌1874(明治7)年末には小野組そのものが破たんしたことも、所在地に関する記録がない一因だろう。

一方築地には、現在の明石町に「電信創業の地碑」(明治2年)、入船3丁目に「靴業発祥の地記念碑」(明治3年)、築地1丁目に「活字発祥の地碑」(明治7年)などの産業関係と、慶応義塾、立教学院、明治学院、工学院大学、暁星学園、雙葉学園などの学校関係の発祥記念碑がある。文明開化を体現していたともいえる築地に、本格的な器械製糸の発祥を記念するものがないのは、製糸業が日本の近代化をささえた産業であったことを考えると、さびしく感じる。



(図1) 東京築地ぜんまい大仕かけきぬ糸を取る図 (ニューヨークメトロポリタン美術館蔵)

本稿では、残された手がかりをもとに小野組築地製糸場の所在地をさがしてみた。

## 第2章 当事者などの証言

当事者などがのこした文献・資料、いわば証言をふりかえってみよう。執筆・公刊時期が古い順に、所在地に言及した個所、設立の事情や当事者相互の関係を整理した。

### 2.1 速水堅曹(1839年 - 1913年)

1870(明治 3)年前橋藩はスイス人ミューラーを雇用し、ヨーロッパの器械製糸技術を導入し、製糸場をつくった。速水は藩側の中心人物の一人であった。彼は『履歴抜粹』と題する日記を残している。

「(1872(明治 5)年)四月九日(旧暦) 築地古川ノ器械ヲ一覽ス。又博覧会ヲ見ル。十二日 古川市兵衛・川村伝蔵ニ逢フ。此時敷島や処分ノ談多シ。」<sup>3)</sup>

小野組築地製糸場を実際に訪問した数少ない記録ではあるが、残念ながら町名への言及はない。なお、この一か月後には、「五月十七日 製糸場ハ小野善助代木村善五郎エ悉皆引渡旨県庁ヨリノ命有り」とあり<sup>4)</sup>、廃藩置県によって群馬県の所管となっていた旧前橋藩製糸場の小野組への貸与(翌年払い下げ)についてふれている。小野善助は小野組の当主であり、木村善五郎は、2.7にでてくる木村朝次郎あるいは2.9の木村長七(幼名豊四郎のち豊三郎)と思われる。

### 2.2 孟齋(歌川)芳虎(1828年頃 - 1887年頃)

芳虎は、「東京築地ぜんまい大仕かけきぬ糸を取る図」(図1)の浮世絵師である。タイトルには「東京築地」とのみで、町名はない。この絵は、1872(明治5)年4月(旧暦)の刊とされている。写真ではないので絵師による脚色に注意すべきだが、つぎの2.3 Japan Weekly Mail の記事や2.6 大塚良太郎の著書、2.7 岩淵修三の説明文、さらには同じスイス人ミューラーの設計になる工部省勸工寮製糸場の図面と符合するところが多く<sup>5)</sup>、建物や繰糸機の構造と生産のしくみをほぼ正確に描写している。

なお芳虎には、ほかに「東京開運橋第一国立銀行近円市中一覽の図」や「東京日本橋繁栄之図」など文明開化を写實的に描いたものがある。

### 2.3 THE Japan Weekly Mail(JULY 26, 1873)

横浜で発行されていた英字新聞の上記日付の号に以下の記事がある<sup>6)</sup>。

「THOSE curious in the reeling of silk might be interested by a visit to a silk-reeling establishment in Tskidji. Some eighty women are employed, each woman superintending three reels, every set of twelve reels receiving the necessary rotary motion from a large fly wheel turned by a coolie. The arrangement of the machinery is extremely ingenious, the crossing of the silk as reeled being obtained by a horizontal movement of the reels. The factory, if such it may be called, is private, but a request to inspect the arrangements is never refused.」

築地のなかの場所を特定できる文言はなく、また取材日もわからない。小野組築地製糸場の閉鎖は1873(明治6)年6月とされているので、取材日はそれ以前のはずである。この頃まで同製糸場が操業(実在)していたことをしめす資料である。

### 2.4 阿蘇洲平(1822年頃 - 没年不明)

阿蘇について、本人が1881(明治14)年から1883(明治16)年に著した『坐繰製糸論』など5冊の著書に記していること、2.5 佐野瑛、2.6 大塚良太郎および2.7 岩淵修三の著述以外のくわしい経歴などはわからない<sup>7)</sup>。生年も著書中の記述からの推定である。福島県三春地方の出身であること、生家における乾繭法の紹介があるので、実家は養蚕、繭取引あるいは製糸を生業としていたこと、その縁があつて小野組に招かれ築地製糸場の監督をつとめ、また築地の閉鎖後は小野組が福島県に設立した二本松製糸会社に勤務したことがわかる程度である。

著書のうち『坐繰製糸私論』に、以下の記述がある。

「明治四年東京小野組スイートル人ミーユル氏製糸教師ヲ傭ヒ、同所築地新榮町ニ於テ製糸器械繰ヲ創立ス。余依頼ヲ受テ之ヲ監督シ、以テ器械製糸ノ業ヲ習フ。依テ近國相模武蔵上野下野上總下總岩代磐城甲斐信濃ノ繭ヲ繰カシムルニ初鍋ノ熱

度ハ教師ノ意ニ任ス。頗ル立ノ宜キ有リ、又立難キ質有レハ湯加減ヲ昇降ナシ應スルヲ以テ適度トス。<sup>8)</sup>

所在地を新栄町と明言している。ちなみに、阿蘇が5冊の著書を執筆、出版したのは、現在の埼玉県川越である。阿蘇が二本松製糸会社退職後、故郷の三春に戻らず川越に住みついた経緯、さらに著書には当時の上武(上州と武州)における養蚕、製糸改良運動の記述もあるが、彼自身がそれにどうに関わっていたのかなどのは、わからない。

## 2.5 佐野瑛(1865年頃-1899)

佐野瑛とつぎの大塚良太郎は、当事者ではないし、また同時代者ともいえないかもしれないが、明治の後半になってこの二人が相前後して日本蚕糸業の通史を公刊した。まず、1898(明治31)年佐野瑛は『大日本蚕史 正史』を著わし、1873(明治6)年の項に小野組築地製糸場の閉鎖についてつぎのように記している。

「同月(1873(明治6)年6月)東京築地古川市兵衛ハ、製糸器械ヲ毀チ之ヲ小野組ニ任シ信濃国及各所ニ移ス。是レ信濃ニ新式器械ヲ設置スルノ嚆矢トス。而シテ該地ノ製糸工女ハ凡テ之ヲ岩代国二本松城址ノ製糸場ニ移ス。傳フ古川市兵衛新式製糸器械ヲ設置スルヤ奥州三春ノ人阿蘇周平専ラ之ヲ擔當シ能ク口カスル所アリシト雖モ如何セン収支宜シキニ適ハス故ヲ以テ之ヲ廢業スルニ至ル。<sup>9)</sup>

所在地町名の記載はない。

## 2.6 大塚良太郎(生没年不明)

1900(明治33)年大塚良太郎は『蚕史』を著し、その前編に以下のとおり記している。

「是歳(1870(明治3)年)小野組ノ商人古河市兵衛ハ、曩キニ前橋藩ニ於テ雇入レタルミウラーヲ雇聘シ、東京築地入船町ニ六十人繰器械製糸所ヲ建築シ、奥州三春人阿蘇周平ヲシテ擔當セシム。此場ハ後チ明治六年ニ廢業ス。

東洋蠶史(大塚のこと)手記。當時小野組ニ於テハ、生糸業者ニ資金ヲ貸シタルコト莫大ニシテ、蠶業ノ隆盛ヲ媒助シタル功蹟偉大ト云フベシ。又自ラ六拾人繰製糸所ヲ建設シ、古川市兵衛ヲシテ主任トシ、三春人夷屋周蔵ヲ支配人トシ、製糸ハ新十

九番館(ママ)英人ワタリニ販賣シ、製糸ノ利害得失ヲ研究シタリ。后チ九十六人繰ニ増加ス。其機械ノ構造ハ、ケンネル三本口ニシテ直取ナリ。口出工女ハ三釜ニ一人トシ、水廻シ枠廻シトモ兼用シ、教師ハ石津屋イワトス。明治五年秋(ママ)イワハ、工女六十余人ト共ニ二本松製糸社ニ行ケリ。<sup>10)</sup>

入船町を所在地とするのは、筆者の知る限り、この大塚の『蚕史』が最初である。

なお大塚には、蚕糸業組合中央部に勤務中の1889(明治22)年に『蚕業家必携』<sup>11)</sup>の著書がある。また、1896(明治29)年8月に開所した横浜生糸検査所には、技手として勤務したことがわかっている。

## 2.7 岩淵修三(1854年 - 没年不明)

岩淵は、福島県白河の出身、父がおこした白河製糸会社の経営にたずさわり、1896(明治29)年設立の横浜生糸検査所をへて1902(明治35)年東京蚕業講習所に製糸部設置の際教授陣に加わった。この前後には島根県、宮崎県、滋賀県、岐阜県の蚕糸関係の職を歴任したことがわかっている。また、島根県農商課勤務中の1889(明治22)年には『製糸業心得』を執筆している<sup>12)</sup>。

1916(大正5)年に開催した東京高等蚕糸学校創立三十周年記念祝賀展覧会に、岩淵は所蔵していた(図1)の錦絵と築地に派遣された工女小川タキの写真に自筆の説明文をそえて出品した。

「此ノ錦繪ハ明治四年東京築地入船町ニ設立セル西京ノ生糸商小野組(主人ハ小野善助氏)ノ製糸所ニシテ當時ノ支配人古河市兵衛氏(鑛山業古河男爵家祖先)ノ經營ニ成ル。教師ニハ瑞西人ミーラー氏ヲ招聘シ、現業主任ハ福嶋縣三春ノ人阿蘇周平氏、長野縣高任ノ人木村朝次郎氏等ナリ。製糸器械ハ木製ノ三條繰直繰式ニシテ、運轉ハ人力ヲ以テス。煮繭及繰糸竈ハ全部連竈装置ナルモ、火爐ハ煮繭一竈ト繰糸二竈トヲ連絡シ、煮繭竈ノ下ニ焚火セシ火カヲ繰糸二竈ニ通ジ、而シテ煙ヲ外部煙筒ニ發散セシムル方法ニテ、煮繭工女一名ト繰糸工女二名トヲ一組トナシ、煮繭法ハ殆ド分業的ナリキ。(中略)時恰モ小野組ガ器械製糸所設立ニ際セシヲ以テ明治四年七月廿五日(陰曆)店員櫻井兵吉ニ工女小川タキ外四名ヲ附シ繭數十石ヲ携帶上京セ

シム。<sup>13)</sup>

文脈から岩淵自身の見聞ではなく、櫻井兵吉らの派遣者たちの帰国談にもとづくものである。しかし、(図1)の錦絵、2.6の大塚良太郎そしてこの岩淵の説明文が、前橋藩製糸場、小野組築地製糸場、さらに工部省勸工寮製糸場のしくみを知ることができる貴重な資料である。ただ、所在地としている入船町については、派遣者からの伝聞なのか、2.6大塚良太郎の著書からなのかは、判断し兼ねる。

## 2.8 古河市兵衛(1832年 - 1903年)

1925(大正15)年刊の『古河市兵衛翁傳』に、以下の記述がある。

「同年(1870(明治3)年)十月ミュレルは任期満了せる爲め、前橋藩の傭聘を解かれて横濱に立ち戻つた。このミュレル技師を、翁(古河市兵衛のこと)は直ちに雇入れて、東京築地入舟町に製糸工場開設に着手したのである。<sup>14)</sup>

「入舟町」は「入船町」が正しい。伝記は古河自身の回顧談をもとに茂野吉之助の筆になる。古河の回顧談を筆記したのも『翁の直話』の名で刊行されている。

「シーベル商會の館主に依頼して、さうして瑞西人のミルといふ人を雇ひまして、東京の築地に製糸場を設けました。<sup>15)</sup>」とだけあり、町名はない。伝記の方の上記引用につづくページには、(図1)の錦絵と2.7岩淵修三の説明文の一部が掲載されている。茂野は、岩淵の説明文中にある入船町を伝記に記載したのではなからうか。

## 2.9 木村長七(1852年 - 1922年)

木村は京都の生まれ、小野組に入店、東京に出たのち群馬県方面の為替方業務と生糸取引にかかわった。旧前橋藩製糸場が、1872(明治5)年小野組に貸与され、翌年払い下げられた後その経営にあたったのが、木村である。1938(昭和12)年刊の『木村長七自傳』に以下の記述がある。

「(前略)古河翁は築地へ機械製糸場を設けようとの計畫をされて、丁抹の領事及び貿易商である横濱九十番のシーベルに、機械製糸の技師備入れの相談をされました。偶々前橋藩でも機械製糸をやつて見たいとの希望がありました、速水賢(ママ)

曹と云ふ人が工部省に相談しましたから同省からも此事をシーベルに談じました。シーベルは双方の懇請に依り翌年春伊太利人(ママ)ミルンを欧州から呼び寄せました。かう云ふ次第で古河翁の設計された築地小田原町の機械製糸場が出来たのでありました。」

「小田原町」は、「南小田原町」が正しい<sup>16)</sup>。自伝とはいいながら、『古川市兵衛翁傳』と同じ茂野吉之助がまとめたものである。

なお、木村は1874(明治7)年小野組の破たん後は、古河にしたがって鉱山業に従事し、古河鉱業の幹部にまで昇りつめた。

## 2.10 小野善太郎(1863 - 1933)

小野善太郎は、小野組を構成する一族のうち、生糸事業を担当していた小野助次郎家の四代目である。築地製糸場の創業当時、まだ少年で京都にいた。善太郎が折々に書き残した草稿を、経営史学者の宮本又次が編集し、1966(昭和41)年『小野組始末』の名で刊行した。

「ある時自分は新しい当節の材料を捉えた三枚続きの新版を、土産に貰ったことがあった。それは、「東京築地ぜんまい大仕かけきぬ糸を取る図」と標題し、小野組の製糸場を描写した絵で、今でもありありと眼底に残っている。(中略)煙突の馬首の下辺に、輝かしい井桁の紋章が描かれているのも懐かしい。この絵は、その後手許に見当たらなくなって仕舞つたが、ある時東京高等蚕糸学校の備品中に、同じ色摺りの錦絵があるのを、久し振りで見る機会があった。<sup>17)</sup>

以上10人の証言のうち築地製糸場の所在町名をあげたのは5人、すなわち、阿蘇洲平、大塚良太郎、岩淵修三、古河市兵衛、木村長七である。町名は、新栄町、入船町、南小田原町の三町である。阿蘇はこの製糸場に勤務していた。それゆえ彼の証言が一番信用できそうではある。しかし、大塚、岩淵、古河の入船町、なかでも大塚は、ミューラーを評価し、その肖像写真も入手していたくらいだから<sup>18)</sup>、調査にもとづいて入船町と記載したとおもわれるので、一概に無視はできない。木村の南小田原町については後述する。次章ではこの三町につい

て、そのなりたちをみる。

### 第3章 新栄町、入船町、南小田原町および築地外国人居留地のなりたち

現在の地図上で築地の範囲は、おおむね北は鍛冶橋通り、東は隅田川、南は浜離宮恩賜庭園、西は首都高速道路で囲まれた地域にあたる。よく知られているとおり、明治の初めこの地域に外国人居留地が開設された。前章の三町はいずれも、この居留地内にあった。

江戸を開市場とすることおよびそこに外国人居留地を設けることは諸外国との取り決めであった。幕府は1867年7月(慶応3年6月)頃に、この居留地を築地鉄砲洲一帯に設けることを決定していた。しかし、幕末の混乱のため江戸の開市は数度の延期をへて、ようやく1869年1月(明治1年11月)に実施された。江戸は東京となっていた。外国人居留地の場所について、新政府は幕府の決定を踏襲し、1868年10月(明治1年8月)居留地となる区域内の武家地について上地(土地収用)を命じ、これら旧武家地に町名をつけた。新栄町(1~7丁目)、入船町(1~8丁目)などはこのとき起立され、すでにあった南小田原町には3丁目と4丁目がかくわえられた<sup>19</sup>。

居留地の土地利用には、以下二つのカテゴリーがあった。

- (1)外国人の土地所有を認めず、日本人所有者から家屋の賃借だけができる区域(「相対借り地域」あるいは「雑居地」)
- (2)外国人に土地の永久借地権を与え、建築など自由に利用することができる区域(「狭義の居留地」)

1869年1月(明治1年11月)の東京開市(居留地開設)と同時に外国人に開かれたのは、「相対借り地域」のみであった。これに先だち、相対借り地域内の旧武家地は、1869年2月(明治1年12月)1区画100坪前後にわけて入札があり、日本人に貸出(分譲)された。「狭義の居留地」の開設すなわち外国人による永久借地権の取得は、上地後の建物取り壊し、区画整理・道路・下水等の整備に時間を要し、1870年7月1日(明治3年6月2日)の第一回入札以降となる。

「相対借り区域」と「狭義の居留地」の地理的關係は、居留地全体の北と南に「相対借り区域」があり、その中央に「狭義の居留地」が位置していた。

時代別の地図を(図2)「万延改正新鑄京橋南築地鉄砲洲絵図」、(図3)「明治七年六月 松浦宏東京大小区分繪圖」、そして(図4)「Google Map」によって示す。

### 第4章 三町のなかを絞りこむ

第2章では三つの町名があがった。前章ではこの三町と築地外国人居留地のなりたちをみた。本章では小野組築地製糸場が、三町のどのあたりに位置していたかを、いくつかの側面から資料をもとに絞りこんでみたい。

#### 4.1 小野組の所有地はあるか？

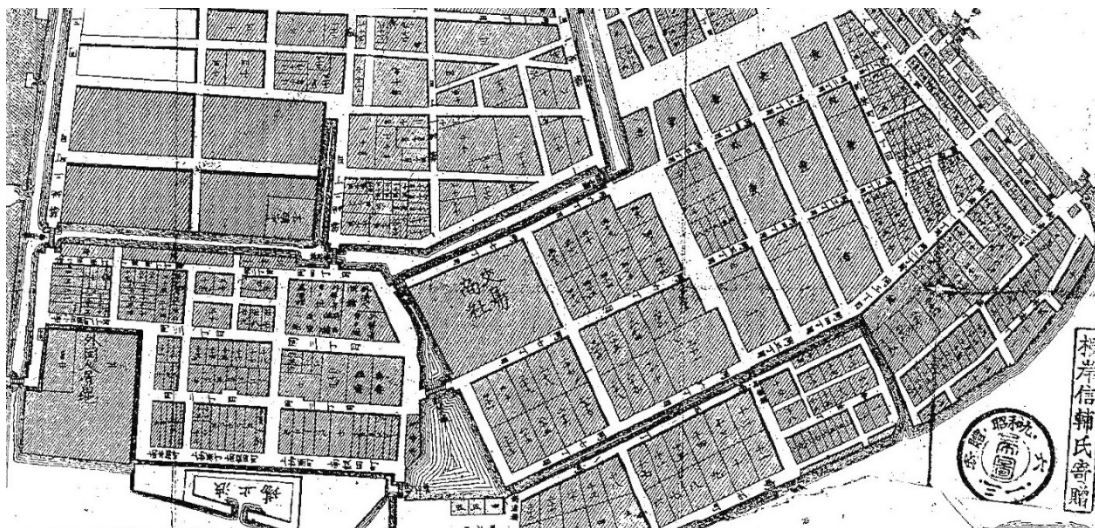
新栄町、入船町あるいは南小田原町のいずれかに小野組の所有地があったならば、製糸場の所在地を特定できるかもしれない。1.10小野善太郎著『小野組始末』に「明治七年戊三月東京地面高書抜」なる小野家文書の要点が収録されている<sup>20</sup>。残念ながら、三町内に小野組の所有地はない。このリスト中の他町にある所有地を、東京都公文書館の沽券図および民間出版の『東京地主細覧2』、『東京地主細覧3』と照合することができる。

沽券図とは、地図上に町名番地、面積、沽券面、所有者名をしるした図で、地図上に土地所有関係を見ることができる。『東京地主細覧』は、沽券図をもとに各町番地の順に所有者名などをリストにしたものである<sup>21</sup>。ちなみに沽券とは、土地の売買を証する書面(土地売買契約書)をさし、地券発行以前は沽券をもって所有権の証とした。沽券面とはそこに記載されている金額、すなわち当該土地の売買金額のことである。たとえば、小野組本店のあった田所町10番地の土地(258坪)の名義は「小野善助西京住出店主 住水谷勝蔵」、沽券面は2,000円、また糸店本店のあった瀬戸物町23番地(234坪)の名義は「小野善右衛門」、沽券面は1,000円とある<sup>22</sup>。



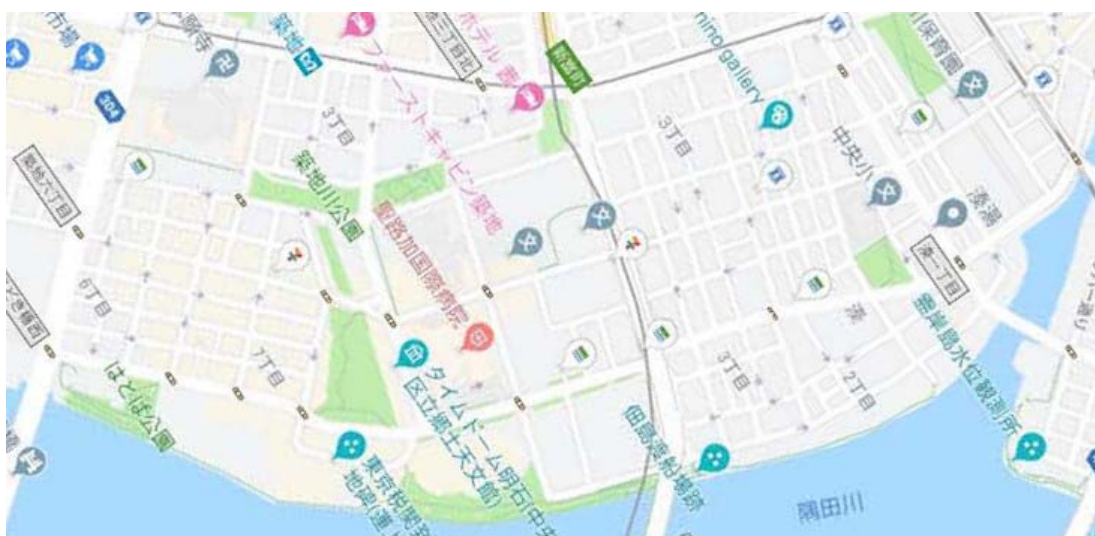
(図2) 万延改正新鑄京橋南築地鉄砲洲絵図より

(東京都立中央図書館蔵)



(図3) 松浦宏 東京大小區分繪圖より

(国立国会図書館蔵)



(図4) Google マップより

#### 4.2 製糸場以外に用途が判明している場所があるか？

小野組築地製糸場は、小野組の所有地ではなく、借地の上に建てられたものらしい。しかし、当時の土地貸借関係を示す資料はなにもない。三町に製糸場以外の用途が判明している土地があれば、そこは製糸場の所在地候補から除外することができる。

(1)新栄町7丁目と入船町8丁目からなるブロックには、交易商社(東京商社)があったことがわかっている。狭義の居留地の一角にあるが、外国人への永久借地権付与の対象とはならなかった。1869年4月(明治2年2月)太政官外国官のもとに通商司を設置(すぐに会計官の所管に移る)、その傘下に民間の通商会社を開港場・開市場に組織させた。東京では、三井組、小野組などを中心に、三井八郎右衛門を商社頭に東京商社が上記の場所に設立された<sup>23</sup>。

(2)もう一か所、入船町5丁目には西村勝三の伊勢勝造靴場があった。沽券図によれば西村は、入船町5丁目1番地の土地1,005坪を所有しており、そこに建坪116坪の工場を建て、1870(明治3)年3月伊勢勝造靴場を創業した。西洋靴の製造は陸軍の後押しによるものであり、その後靴下の生産もこの地でおこなわれたので、メリヤス産業発祥の地でもある<sup>24</sup>。

#### 4.3 地誌『東京府志料』掲載の物産に「生糸」はあるか？

『東京府志料』は1872年5月(明治5年4月)陸軍省は全国の地誌編さんを企画して、各府県に資料の提出を命じた。東京府の調査結果控が『東京府志料』である。町ごとに、土地の形勢、戸数・人口、車馬の数とともに物産をまとめたものである。入船町1丁目に西洋服、2丁目に腹掛、股引、足袋が記載されている。ほかの町には物産の記載はない。

「生糸」のみならず西村勝三の「西洋靴」、本木昌造・平野富二の「金属活字」もない。物産の調査は明治5年が基準とされているので、金属活字がないのはわかるが、伊勢勝造靴場と小野組築地製糸場の製品が、掲載されていない理由はわからない<sup>25</sup>。

#### 4.4 1872年4月3日(明治5年2月26日)の火事による被災地域は？

1872年4月3日(明治5年2月26日)に和田倉門内兵部省(旧会津藩邸)が火元の火事は、築地にも甚大な被害をもたらした。西本願寺も有名な築地ホテル館などもふくめ相対借り地域の南部は、南飯田町の一部を除いて全焼した。また、狭義の居留地内も洋館が8軒程度あったようだが、その一部も被災した<sup>26</sup>。南小田原町も全焼した<sup>27</sup>。『木村長七自傳』が伝えるように、小野組築地製糸場が南小田原町にあったならば、被災しているはずである。

しかし、製糸場の閉鎖は翌1873(明治6)年6月とされており、かつ1.3 Japan Weekly Mail のとおり翌年の閉鎖直前と思われる見学記事もあるので、製糸場が焼失したとは考えられない。さらに火災直前に築地ホテル館の塔屋から居留地方向を撮影した写真がある<sup>28</sup>。これを見ると、築地ホテル館から狭義の居留地までの間、すなわち南小田原町をふくむ相対借り地域の南部は、ほとんどが江戸時代は町人地で家屋が密集している。とても100人規模の製糸場が立地しているようには見えないし、錦絵にある複数煙突を有する建物を見つけることもできない<sup>29</sup>。南小田原町というのは木村の記憶ちがいと考えるしかない。

#### 4.5 100坪地主多数のブロックは借地交渉に手間がかかる

ほぼ同規模の工部省勸工寮製糸場の建坪は140坪であり、内部にかまど、外部に煙突が多数ある建物は、火災の危険をさけるため建物周囲に十分な空き地を確保する必要があっただろう。少なくとも400~500坪程度の敷地が必要だったのではなからうか。第3章で相対借り地域の旧武家地は、100坪前後に分割され日本人に貸与(分譲)されたことに触れた。必要な敷地面積を確保するには100坪の地主多数と交渉する必要があり、なかには賃貸を拒否する地主がいるかもしれず、検討段階から小野組はさけたのではなからうか。

沽券図および『地主細覧』で確かめると、このようなブロックは、上記4.4で全焼地域としてのぞいた南小田原町もそうだが、新栄町1丁目も該当

する。すなわち、新栄町1丁目は総面積約2,380坪だが4つのブロックにわかれて25の区画があるが、地主の数は19人である。複数区画を所有している地主でもその最大は3区画、296坪を所有する地主が一人いるにすぎない。これに近いところが入船町1丁目だが、2つのブロック、11区画あり地主は4人だが、1人で6区画603坪所有の地主がいるので、入船町1丁目の可能性はこのころ。

#### 4.6 狭義の居留地はのぞくべきか？

4.2で東京商社の敷地を、候補からのぞいた。そもそも狭義の居留地全部を候補からのぞくべきではないのか。外国人が永久借地権を取得し、その利用のための場所だから、日本人の小野組が製糸場を建てることは不可能である、と考えるのが自然だろう。しかし、筆者はこれにあえて疑問をはさんでみたい。以下にその理由を述べよう。

小野組とシーベル・ブレンワルド商会とはかなり緊密な関係にあった。シーベル・ブレンワルド商会は、スイス人のヘルマン・シーベルとカスパー・ブレンワルド共同経営の商社である<sup>30</sup>。1865(慶応1)年横浜に拠をかまえて以来、日本の生糸輸出に大きな足跡を残した。生糸輸出にとどまらず、器械製糸法の西欧からの導入に果たした役割も忘れてはならない。前橋藩製糸場および小野組築地製糸場の設立にあたり、スイス人製糸技術者ミュラーを前橋藩と小野組に紹介したのは同商会である。そして小野組築地製糸場の設立にあたっては、「紹介の労」という以上の関与があった。ブレンワルドが書きのこした日記があり、その1871年9月17日(明治4年8月3日)には、つぎのように記されている。

「古河が来て話をした中で、ガイセンハイマーが古河と僕ら(シーベル・ブレンワルド社)と三者で生糸業務をやらないかと持ちかけたそうだが、そんな話には乗らない。古河はウォルターに、もう三万から五万ドル貸さないかと聞いたそうだが、ウォルターは僕らがすでに前貸した五万ドルで当分十分だと答えていたようだ。<sup>31</sup>」

ガイセンハイマーは、当時横浜で「和蘭八番館(蘭八)」と称されたエッシュ・リリエントナル商会の有力出資者。彼は自ら出資して器械製糸の製糸場を

日本国内につくることを政府に提案した。外資の国内進出をさけたい政府は、この提案を拒絶した。これを機に、政府自らが国営の富岡製糸場を建設することになった。ちなみに富岡製糸場を建設するにあたって、同商会はフランス人のブリュナを政府に紹介したり、フランスからの機械輸入を一手に取り扱うなどした。ウォルターはイギリス人のジェームズ・ウォルターで当時は、シーベル・ブレンワルド商会の番頭格であった。

上記引用文は、翻訳文であること、書いた本人だけがわかればよい日記という制約もあり、背景となる事情と意味を読みとるのはむづかしい。「ガイセンハイマーの申し出」とは、三者(小野組、シーベル・ブレンワルド商会、エッシュ・リリエントナル商会)合弁による製糸場経営を意味するのだろうか。ならば、ガイセンハイマーの参加をことわったということは、二者(小野組とシーベル・ブレンワルド商会)による合弁事業計画が存在していたのだろうか。ブレンワルドは、シーベル・ブレンワルド商会が、小野組に対して貸し付けをコミットしていたことも述べている。「前貸し」とあるので、生糸代金の前渡しの形をとった貸付で、小野組が生糸を同商会に納入することによって返済されるしくみであったのだろう。では小野組はこの5万ドルを何に使ったのだろうか。日記の日付は9月で製糸場の操業開始までまだ1年近くあり、かつ繭の収穫期ではないので繭購入資金とは考えにくい。おそらくは製糸場の建設資金なのだろう。貸付条件はわからないが、製糸場閉鎖の1873(明治6)年6月までには完済されたのだろう。

このほか小野善太郎の著書には、シーベルが関西旅行のさい、京都の小野組本店に立ち寄ったことが記されている。このときシーベルには古河市兵衛が同行している<sup>32</sup>。

小野組とシーベル・ブレンワルド商会との関係の深さを知ると、小野組が製糸場の敷地も同商会から借りたとしても、さほど不自然には感じられない。狭義の居留地の永久借地権を証する地券には、日本人に貸し出すことを禁止する文言はないし、もし禁止されていたとしても、外国人の行為は治外法権であったから、日本政府は何もできなかっただろう。シーベル・ブレンワルド商会は、1870

年7月1日(明治3年6月2日)の入札で、狭義の居留地5番(557坪)と52番(495坪)を落札し、翌年の第2回入札ではさらに隣接地51番(496坪)を落札している。もし、このいずれかに製糸場を建てるとすれば、第1回入札で取得した52番だったのではないか。ここはまだ周囲が空き地だった。

初期の器械製糸に外資が関与した例が他にもある。ほかならぬ国営の工部省勸工寮製糸場がその例である。この製糸場は、1873(明治6)年1月に開業式典を挙げてのもの、2年たらずで工部省自体はその経営を放棄し、1874(明治7)年11月からは、工場全体を民間に貸し出すことになる。最初の1年間は、新潟県の上田富蔵と群馬県の徳江八郎に、1875(明治8)年11月から1年間は、東京府の久保田信左に、1876(明治9)年12月から2年半の間は、横浜弁天通の中村宗兵衛にと、借り手は転々とする<sup>33</sup>。

上記賃借人の名義はいずれも日本人だが、『日本蚕糸業史』第二巻「製糸史」によればスイスのバヴィエ商会が実質的な経営者であった<sup>34</sup>。1876(明治9)年になると、フランス人とスイス人二人の私雇外国人が居留地外居住の許可を取得している<sup>35</sup>。

なお製糸場は1880(明治13)には北豊島郡石神井村の本橋勝右衛門に払い下げられた。

今一つ、小野組築地製糸場については、ミューラーの就業許可に関する記録がない。外国人が居留地内に居住すること自体は自由だったろうが、居留地内であれば日本企業が雇用する場合でも許可は不要だったのだろうか。前橋藩製糸場および工部省製糸場では、ミューラーの外国人雇用許可の記録がある。製糸場は、表向きシーベル・ブレンワルド商会の事業としていたのだろうか。52番の土地ならば、それも可能だったろう。むしろ、小野組が雇用申請する方が不自然だったろう。

荒唐無稽かもしれないが、小野組築地製糸場が、狭義の居留地にあった可能性を考えてみた。その可能性は、所在地が特定できていない現在、否定できないように思える。外国人の住居、領事館や商会の事務所が主たる用途であるべき居留地に工場(製糸場)は意外かもしれないが、築地でも前述の伊勢勝造靴場があったし、横浜などその居留地にはお茶場とよばれる茶の再製(乾燥)工場が多数あったことを知ると、決してありえないことではないと思う。

(表1) もと築地居留地の時代別土地利用と製糸場立地の可能性

← 南		→ 北							
入船町	八丁目	七丁目	六丁目	五丁目	四丁目	三丁目	二丁目	一丁目	
幕末の土地利用	(遠江 相良藩) 田沼玄蕃守  (丹波 篠山藩) 青山下野守	(豊後 岡藩) 中川修理大夫  (武蔵 川越藩) 松平周防守	川 (明治初埋立)	(近江 彦根藩) 井伊掃部頭					
明治初年の土地利用	狭義の居留地 (貿易商社)		相対借り地域 (伊勢勝造靴場)						
製糸場立地の可能性	×	○	○	×	◎	◎	◎	△	
現在の町名	中央区明石町		中央区入船3丁目			中央区入船2丁目		中央区入船1丁目	
新栄町	七丁目	六丁目	五丁目	四丁目	三丁目	二丁目	一丁目		
幕末の土地利用	(丹波 篠山藩) 青山下野守	(豊後 岡藩) 中川修理大夫  (武蔵 川越藩) 松平周防守 他	(阿波 徳島藩) 松平阿波守  (摂津 尼崎藩) 松平遠江守 他						
明治初年の土地利用	狭義の居留地 (貿易商社)		相対借り地域 (所有者多数)						
製糸場立地の可能性	×	×	○	◎	◎	◎	×		
現在の町名	中央区明石町		中央区入船3丁目		中央区入船2丁目		中央区入船1丁目		

南小田原町をのぞく入船町と新栄町について、小野組築地製糸場立地の可能性を(表1)にまとめた。表中◎を付したところは、ブロック内で入船町と新栄町が境を接している、片方の道路に面する土地は入船町、反対側の道に面する土地は新栄町というブロックである。つまり、2.4の阿蘇洲平の新栄町も2.6大塚良太郎などの入船町も、どちらも正しいという土地である。

## 第5章 製糸場の立地としての東京築地

養蚕は、広大な桑畑を必要とし、かつ労働集約の産業である。その産物(繭)から生糸をつくる製糸業は、低付加価値が宿命である。いかに明治の初期とはいえ、皇城(皇居)から目と鼻の先の東京築地で製糸業というのは、合理的な経営判断だったのだろうか。主題からはそれだが、この点について製糸場に必須の用水の便と繭の調達という二つの側面から、当時の東京の立地事情をふりかえってみたい。

### 5.1 用水の便

製糸の工程では、繭を煮てほぐれやすくする必要があり、さらにその繭を湯につけた状態から糸を引きだすので、大量の水が必要である<sup>36</sup>。築地は江戸時代に海を埋め立てた土地であるからそこに井戸を掘っても海水混じりの水しか汲みあげられなかっただろう。また周囲を川で囲まれていたが、幕府崩壊直後の東京は失業者があふれ、乞食も多数いたようなので、川から良質の水を汲むことができたとは思えない。では、(図1)錦絵右下の水桶をかついだ男性は、どこから水を汲んできたのだろう。

筆者は、周辺に配水されていた玉川上水の水を汲んできたものと、考えている。東京都水道歴史館は、江戸時代からの樋線図(水道管配管図)を多数所蔵している。ただ、この樋線図には作成年月日がないものが多く、かつ作成後の加筆もあるので、特定時点の樋線図はあくまでも推測によるしかない。居留地区画整理後と思われる樋線図を見ると、新栄町および入船町に上水がめぐらされているのがわかる。錦絵の男性は、おそらく周辺の上水井戸などから水を汲んできたのだろう。

### 5.2 繭の調達事情と桑茶政策

つぎに、当時の東京における繭の供給はどうだったろう。小野組築地製糸場の繭調達先について、阿蘇洲平は「近國相模武蔵(東京都・神奈川県・埼玉県)上野(群馬県)下野(栃木県)上總下總(千葉県)岩代磐城(福島県)甲斐(山梨県)信濃(長野県)」と広範囲の地域をあげ<sup>37</sup>、岩淵修三は、白河からの派遣者に「繭數十石ヲ携帯上京セシム」と記録している<sup>38</sup>。繭調達が容易ではなかったことが、うかがえる。また、工部省製糸場も、操業初年度の1873(明治6)年4月東京府下の戸長へ「勸工寮製糸所ニ於テ人民所有ノ夏繭ヲ買フ」旨を布達して、江戸時代の町触の手法で繭を集めようとしていた<sup>39</sup>。かといって、東京にまったく繭がなかったわけではないようだ。1871(明治4)年に昭憲皇太后(明治天皇の皇后)が養蚕を始めたとき、できあがった繭を生糸にしたのは、深川授産場から派遣された5名の女性であった<sup>40</sup>。授産場とは、失業者などに職業訓練をほどこし自立をうながすための施設である。そこで生糸をつくる技術を教えることが授産の目的にかなうとされていたのだろう。ということは、東京にも繭があったということではある。

自家産の繭を自家で細々と製糸するならまだしも、小野組築地製糸場あるいは工部省勸工寮製糸場のように大量に繭を消費する製糸工場となれば、話は別である。小野組や工部省の立地(投資)決定には、必要かつ十分な量の原料調達について、裏付けがあったはずである。それが、政府の桑茶政策である。

明治初年における東京の土地利用は、およそ武家地60%、寺社地20%、町人地20%といわれている<sup>41</sup>。百万都市といわれた江戸の人口は、幕府崩壊後ほぼ半減したといわれている。人口の半分をしめていた武家のうち、諸藩の江戸詰藩士は国元に帰郷してしまい、幕府に仕えていた旗本・御家人は、慶喜にしたがって駿府にくだるものや、上野から東北の戦争を戦うものなど、新政府に仕官したものをのぞいて、散り散りになってしまう。武家人口激減の結果、彼らに物品販売、サービス提供で生計を立てていた町人はたちまちその糧をうしない、失業者、浮浪者、乞食となった。明治1年10月から明治2年8月の1年たらずの間に、「府下棄児口



(図5の1) 東京築地鉄砲洲景 右側

(東京都立中央図書館蔵)



(図5の2) 東京築地鉄砲洲景 左側

(東京都立中央図書館蔵)

死幾ント二百人、餓死又三百人ニ及ベリ」<sup>42</sup>と伝えられている。明治2年の築地を描いた錦絵に「東京築地鉄砲洲景」がある。6枚組の大作で、上部に築地ホテル館、外国人居留地、新島原遊郭などの繁栄の様子を描いた絵と、下部に日本人と外国人との会話が記されている。最初の会話は、日本人の乞食と外国人との掛け合いになっていて、絵とは対照的な当時の世相を浮き彫りにしている<sup>43</sup>。

このような状況を前提に、旧武家地の活用による貧民救済(授産)に乗り出したのが、府知事の大木喬任であった。空き地になっている旧武家地を貸

し与え、そこに桑や茶を植えさせれば、失業者・浮浪者に生計をたてる機会がうまれるし、生糸や茶の輸出増加につながると考えたわけである。1869年9月30日(明治2年8月25日)の太政官布告に、「(前略)府下諸邸ノ上地を開墾シ、桑茶ヲ植エ、老幼婦女子ト雖各其業ヲ営ミ凍餓ヲ免ルヽノ方ヲ得セシメントス(後略)」とある。しかしながら、この桑茶政策は目に見える成果をあげることはなく、1871(明治4)年末までには放棄された。

古河市兵衛は、この間の事情を「處が段々やつて見ると、時勢の移り變り烈しく、追々桑畠も無くな

り、繭も思ふやうに出ないと云ふところからして、初めの見込通りには行かなくなつた。<sup>44</sup>と語っている。小野組築地製糸場は、製糸技術史に大きな足跡を残したが、経営史的には失敗事例であった。

## 第6章 おわりに

小野組築地製糸場の所在地をピンポイントに特

- 1 明治のはじめにヨーロッパから伝わった製糸法を、イタリア式とフランス式の二つにわけける方法がある。前橋藩製糸場、小野組築地製糸場、工部省勸工寮製糸場などをイタリア式、富岡製糸場などをフランス式とする分類法である。しかし、その基準は諸家によって一定せず、基準としているいくつかの要素技術をみると、それぞれ独立の技術であり、自由に組み合わせることによってさまざまな製糸機械、生産システムをつくることができる。したがって、一般にいわれているイタリア式とは「イタリアで製糸業に従事したスイス人ミューラーによって伝えられた製糸法」、フランス式は「フランス人ブリュナによって伝えられた製糸法」という意味しかもたない。しかも、イタリア統一は1860年だから、国よりさきに製糸法ができていたことになる。岩倉使節団のローマ報告の一節に、「繭から繊維を引き出して糸にする機械は何種類もある」と述べている。(久米邦武編著水澤周訳注。現代語訳米欧回覧実記 第4巻。慶応義塾大学出版会。2004年。p.350-351) 発明や改良によって進歩する技術を分類する方法として、あまり科学的とは思えない。筆者は単に器械製糸とよぶことにする。
- 2 長野恭彦。はじめて器械製糸を伝えたスイス人ミューラー。東京産業考古学会 産業考古学研究。2014。1。p.32-38
- 3 速水堅曹。履歴抜粹 自記。前橋市編。前橋市史第7巻資料編。前橋市。1985。p.943。  
なお博覧会は、1872年3月23日～5月12日(明治5年3月10日～4月30日)に湯島聖堂で開催されたもの。川村伝蔵は江戸の豪商といわれ、前橋藩製糸場にならって、出身地の鬼怒川河畔に大嶋商舎という製糸場をつくる。敷島やは、前橋藩が横浜に設立した生糸売り込み問屋。廃藩置県後の処理を相談したのだろう。
- 4 同上。p.944。
- 5 図面は袋におさめられ、「教師イタリア人 勸工寮傳習 製糸器械繪図」と表書きがある。この図面は、鈴木三郎東京農工大学名誉教授(故人)が所蔵し、著作にも紹介されているものだが、教授の没後(1982年)長い間行方不明となっていた。最近になって、教授本人または未亡人から東京農工大学科学博物館(当時は繊維博物館)に寄贈されていたこ

とがわかった。さらに、工部省勸工寮製糸場の所在地は、港区虎ノ門2丁目(肥前佐賀藩の中屋敷跡)だが、再開発に先立つ2015年から2016年にかけて発掘がおこなわれた。その際大量のレンガが出土したことが報告書にあり、図面のかまど、煙突がレンガづくりなのと符合する。しかし、製糸場の存在を認識していたものの、港区教育委員会は明治以降の遺構は調査対象外と決定してしまう。博物館が受贈のときから図面を記帳・記録・整理・保管していて、発掘に利用されていければ、図面内容との対照・確認や新しい事実がわかったかもしれない。小野組築地製糸場と同規模・同様とされているので、悔やまれる。

- 6 THE Japan Weekly Mail. VOL.IV. No.30. JULY26, 1873. p.521. Google Play Books で閲覧、原資料は Stanford University Library 蔵
- 7 阿蘇の5冊の著書名は以下のとおり。『坐繰製糸論』(1881年刊)、『坐繰製糸論續編』(1881年刊)、『坐繰製糸私論』(1882年刊)、『坐繰製糸私論續編』(1882年刊)、『坐繰製糸私論附録』(1883年刊)
- 8 阿蘇洲平。坐繰製糸私論。出版社不明。1882年。p.14
- 9 佐野瑛。大日本蚕史 正史。大日本蚕史編纂事務所。1898年。p.394
- 10 大塚良太郎。蚕史 前編。大塚良太郎。1900年。p.259
- 11 大塚良太郎。蚕業家必携。蚕業商会。1889年
- 12 島根県農商課編。製糸業心得。博広社出版部。1889年。なお、1891年に訂正増補版がでている。
- 13 東京農工大学科学博物館蔵が、錦絵、小川タキの写真、岩淵の説明文の三点を一枚に表装したものを所蔵している。
- 14 茂野吉之助編。古河市兵衛翁傳。五日会。1926年。p.42
- 15 五日会編。翁の直話。五日会。1926年。p.45-46
- 16 小田原町は、日本橋近くの魚市場で栄えた町。築地ができると、もとの町の南という意味で南小田原町の名がつけられた。明治初年にも魚屋があったようである。
- 17 小野善太郎著 宮本又次校訂。小野組始末。青蛙房。1966年。p.81-82

- 18 「日本蚕業雑誌」第104号(1897(明治30)年7月号)巻頭にミュラーの肖像写真が掲載されているが、これは大塚が提供したものである。定期的に『蚕史』執筆中であり、その調査過程で写真を入手したものと思われる。
- 19 東京都編. 都市紀要四 築地居留地. 東京都. 1957年. p.90-92
- 20 小野善太郎著 宮本又次校訂. 小野組始末. 青蛙房. 1966年. p.150-158
- 21 東京地主細覧2および3. 杉本尚正. 1873年.
- 22 1874年小野組破たん時に大蔵省勘査局がつくったと思われる「小野組社中人名」のリストがある。水谷勝蔵は、小野姓の6名をのぞくと、リストの6番目に掲載されている。原本は、三井文庫蔵。
- 23 会計官にいた大隈重信の施策だが、諸外国からの反発があり、明治4年7月には通商司が廃止され、東京貿易商社は東京府の所管となる。おもな取引は、米油の限月取引となっていたようで、居留地内に立地する意義も小さく、1872年1月(明治4年12月)には兜町に移転する。のちの東京米穀取引所の前身である。跡地は、1884(明治17)年以降狭義の居留地として外国人を対象に入札された。
- 24 西村勝三については、下記を参照した。  
西村勝三翁傳. 西村翁伝記編纂会. 1921年  
なお西村は、西村茂樹の弟である。
- 25 都政史料館編. 東京府志料第1巻之1-巻之27. 都政史料館. 1959年
- 26 川崎晴朗. 築地外国人居留地. 雄松堂出版. 2002年. p81
- 27 『武江年表』によると、このとき南小田原町で全焼したのは1~3丁目と記されている。後述の写真をみると、4丁目付近は空き地が目立つので、焼けなかったのだろう。(今井金吾校訂. 定本武江年表 下. ちくま学芸文庫. 2004年. p.244-245)
- 28 金行信輔. 写真のなかの江戸 絵図と古地図で読み解く20の都市風景. ユウブックス. 2018年. p.36-37, p.172-173  
掲載されているもとの写真は、横浜開港資料館が所蔵している。
- 29 小野善太郎著書のリストに、築地上柳原町三番地に小野組所有地がある。名義は「小野善二郎沽券代難波藤七(この名前も「小野組社中人名」にみえる)」、面積は52坪、沽券面100円である。ここも南小田原町同様建物密集地であり、そもそも52坪では製糸場の敷地としては狭すぎる。では前出の写真に、新栄町と入船町は映っているのだろうか。残念ながら、築地ホテル館の建物もカメラも隅田川の方向を向いているため、狭義の居留地の洋館風の一部数軒は見えるが、居留地西側の新栄町と入船町を見ることはできない。
- 30 この会社は存続している。社名は、DKSH ジャパン株式会社である。
- 31 横浜開港資料館編. プレンワルドの幕末・明治ニッポン日記. 日経BP社. 2015年. p.111-112  
横浜開港資料館は、この日記の抄訳を逐次公開しつつある。なお、原本は前記DKSH ジャパン株式会社が所蔵している。
- 32 小野善太郎著 宮本又次校訂. 小野組始末. 青蛙房. 1966年. p.134  
シーベルは、1872年5月25日(明治5年5月13日)に日本を離れたので、京都訪問はそれ以前のはずである。なおシーベルは帰国の翌年、岩倉使節団のスイス滞在中の接待役をつとめている。(久米邦武編著水澤周訳注. 現代語訳米欧回覧実記 第5巻. 慶応義塾大学出版会. 2005年. p.56)
- 33 大蔵省編. 工部省沿革報告. 大蔵省. 1889年. p.687-693
- 34 大日本蚕糸業史編さん委員会編. 大日本蚕糸業史第二巻製糸史. 大日本蚕糸会. 1935年. p.56
- 35 東京都編. 都市紀要四 築地居留地. 東京都. 1957年.  
巻末の附表A「自明治四年至明治九年末居留地外居住外人表」に二人の名がある。フランス人はエー・コイ(職業欄は、工業)、スイス人はリウドウィック(同機械方並繭検査)である。なお、この製糸場では、のちに第4代横浜生糸検査所長になる今西直次郎が、リオンに留学する前エー・コイについて実習したことが、わかっている。
- 36 製糸場の動力に水車を使うようになると、用水の便は製糸場立地の最重要条件となる。東京に限っても工部省勧工寮製糸場、内務省勧農局内藤新宿製糸場とも水車を動力につかい、玉川上水から水をひいた。小野組築地製糸場とあわせて三つの製糸場が、はからずも江戸のインフラによってなり立ったというのは興味深い。
- 37 阿蘇洲平. 坐繰製絲私論. 出版社不明. 1882年. p.14
- 38 岩淵修三の説明文(東京農工大学科学博物館蔵)
- 39 原本は国立公文書館蔵
- 40 明治神宮監修. 昭憲皇太后実録 上巻. 吉川弘文館. 2014年. p.54-55
- 41 東京都編. 都市紀要13 明治初年の武家地処理問題. 東京都. 1965年. p.1
- 42 東京都編. 都市紀要13 明治初年の武家地処理問題. 東京都. 1965年. p.82
- 43 つづいて出てくる日本人は、通行人、糸商人、建築職人、夜鷹、蚕種商人、芸者、茶商人、女郎とやり手婆
- 44 茂野吉之助編. 古河市兵衛翁傳. 五日会. 1926年. p.44-45